

菊藤明道 編 『妙好人研究集成』

笹田博通

「妙好人」とは浄土真宗の門徒で特に信仰篤き人々を指す言葉であるが、タイトルにも示されているように、本書はその妙好人に関する従来の優れた研究を集成したものである。編者の菊藤明道氏は「編集後記」でこう説明する、「本書は、これまでに発表された五百編を超える『妙好人伝』および『妙好人』に関する論文の中から、主要論文三十八編を選んで収録したものである。本年、妙好人の信心・宗教心を最初に思想化し体系化して世に、世界に紹介された鈴木大拙博士歿後五十年にあたり記念として上梓させていただいた」（七二七頁）と。本書に収録された諸論文の卓越性はここからもすでに窺われるが、本書の内容を検討するにあたって、全体の構成がいかなるものであるかを「目次」に拠つて確認しておこう。（括弧内は執筆者を表す。敬称省略。）

序 妙好人伝研究の経緯と意義（林智康）
序 妙好人研究の意義（佐藤平（顯明））

第一部 「妙好人伝」の研究

「妙好人伝」とその作者たち（佐々木倫生）

初篇 「妙好人伝」の一考察（朝枝善照）

仰誓の立場と「親聞妙好人伝」（大桑 齊）

初期 「妙好人伝」成立の背景（島田一道）

幕末における「妙好人伝」編纂の意味（柏原祐泉）

「近世門徒伝」と「妙好人伝」（平田 徳）

妙好人伝編纂史再考——大正期真宗信者言行録を手がかりにして——（黒崎浩行）

「妙好人伝」の出版とその問題（土井順二）

「妙好人伝」と「続妙好人伝」の出版と流通（万波寿子）

「往生伝」と「妙好人伝」——両伝の特色と関連を中心に——（菊藤明道）

近世 「妙好人伝」研究の経緯（児玉 識）

第二部 妙好人の研究

妙好人の研究——淨土真宗と妙好人——（林 智康）

妙好人の言動と真宗聖教（龍口明生）

妙好人の心理学的研究（岡 道固）

教育における妙好人の心性の陶冶（川村覚昭）

大乗浄土教の精華——妙好人——（本多靜芳）

妙好人の姿（志村有弘）

妙好人と私（玉城康四郎）

妙好人の現代的意義（五十嵐明寶）

妙好人の回心経験をめぐつて（寺川幽芳）

真宗における宗教的人格——妙好人の人間像を訪ねて——（釋 徹宗）

妙好人の認識の在り方と世界觀——無対辯による苦の超越——（中尾将大）

妙好人から学ぶもの——妙好人椋田与市同行の生活と念佛——（直林不退）

妙好人輩出の宗教的社会機能——真宗の法座について——（吾勝常行）

妙好人を通して見た生命観（新保 哲）

法の流れを入れる者——現生正定聚の原型と妙好人——（井上尚美）

妙好人六連島お軽の歌——絶望と歓喜——（石田法雄）

石見の善太郎——妙好人と言葉——（松塚豊茂）

讃岐の妙好人 庄松の言行にみる生死觀と超越——『いのち』の地平の物語——（北岑大至）

ようこそ・源左——妙好人因幡の源左における宗教的生——（岡村康夫）

妙好人像の形成と現代における妙好人の意義（塙田幸三）

妙好人と智慧——柳宗悦「無対辯文化」が投げかけるもの——（藤 能成）

世界に広がる妙好人——ヨーロッパの念仏者たち——（佐々木惠精）

ヨーロッパの妙好人と「無対辯」の思想——ハリー・ビーパー師の事績を通して——（那須英勝）

妙好人浅原才市の「そのまま」について（佐藤 平〈顕明〉）

大拙先生と妙好人（楠恭）

妙好人の存在（柳宗悦）

妙好人「才市」——才市覚帳を通して——（鈴木大拙）

本書はこのように、妙好人に関する一九五〇年代以降の珠玉の諸論文（「初出一覧」参照）を「『妙好人伝』の研究」（歴史的研究）、「妙好人の研究」（思想的研究）という二つの部門へと分類しつつ収録したものである。執筆者については、専門が「真宗学」「宗教学」「宗教哲学」「仏教学」「仏教史学」「日本思想史」「日本仏教（思想）史」「近世文学」「心理学」「教育人間学」「行動科学」など、きわめて広範な領域に亘っており（「執筆者紹介」参照）、また選抜された三十八名のなかに、本学会に属する会員二名（川村覚昭氏、佐々木惠精氏）が入っているのは真に悦ばしいことである。本来ならばすべての論文に考察を加えねばならないところであるが、以下、特に興味を惹かれた論文のみを紹介・検討させて戴くことにしたい。

先ず第一部・「『妙好人伝』の研究」の冒頭に置かれている佐々木（倫生）論文（「『妙好人伝』とその作者たち」）では、仰誓、僧純、象王という三人の「『妙好人伝』の編者にみられる意図の差異が究明され、とりわけ仰誓（自らは上梓しなかつた）・僧純双方の関わりをめぐって、「学解の人ではなく信解の人、金剛心を持った正定聚の機、真仏弟子」、「そのような人々を学林の内部でなく、一般の僧俗の中に見出し、また一般の人々とともに信心歡喜を共にすること」（二三頁）を目指した仰誓が、妙好人を「往生人」と、「淨土行を修して臨終に何らかの奇瑞を得た人」（一五頁）と峻別したのに対し、「唱導家」たる僧純は、妙好人の概念と往生人のそれとを包摶しつつ、「譬喻、因縁談を織りませて、しかも現実的な諸問題をも含めて、無縁のものを有縁なものたらしめるべく説法して」いる（二七頁）と論定される。これは、「『妙好人伝』の編纂の重層的性格を解明する上でも重要な指摘であろう。さらに、「僧純は当時の社会状況・政

治状況を考慮し、当時の体制道徳を履行する妙好人を記したが、眞の目的は「家内相続」にみられるような法義の相続、真宗の教えを伝え広めること」にこそあつた（九〇頁）（島田論文）、との解釈や、「江戸時代の『妙好人伝』が、当時の社会や教団の理想的人間像として社会を安定させる役割を担つてきたとする見方があることは否定できない。しかし、近代の価値観に照らして問題があるとの理由で、妙好人の存在を軽視してきたこともまた問題であろう」（二二八頁）（菊藤論文）、との言明も傾聴に値するものである。

第二部（「妙好人の研究」）は個々の妙好人の宗教体験に関する諸論文を収録しているが、冒頭の林論文（「妙好人の研究——浄土真宗と妙好人——」）では、「妙好人及びその信仰は、今までの真宗教学からは軽視され、関心を持たれてはいなかつた」（二七六頁）との反省のもと、教学的研究は勿論、「我々は現在生きている真仏弟子としての妙好人を発掘して世に紹介し、さらに教団の枠を超えて、新しい時代に生きる念仏者を育てていくことが重要な課題である」（二七九頁）と主張される。こうした課題をもふまえつつ第二部の諸論文の内容を検討するとき、たとえば、川村論文（「教育における妙好人の心性の陶冶」）は「自律の理念」に立つ近代教育の論理の限界を指摘した上で、その限界を突破しうる宗教（「護信」）の論理、その宗教と教育の接点たる「有限性（矛盾性）」、有限性＝矛盾性（生死）をそれ自体として生き抜いた妙好人の心性に論及し、そこから、「そのような存在になりうるか、なりえないか、ということは、基本的に陶冶の問題である。その意味で、生死を超えるためには妙好人の心性に見られるような宗教的陶冶が不可欠である」（三三八頁）と説明する。これは、仏教教育とその研究に対して重要な問題を提起しうるものであるが、妙好人については、その存在を「限りなき過去から、生きとし生けるもの、ありとあらゆるものと交わりつつ、生まれかわり死にかわり、死にかわり生まれかわり、輪廻転生して、此處に、今、実現している宿業体」に関連づける解釈（三六八—三七〇頁）（玉城論文）もまた示唆に富むものである。

妙好人研究の先駆者たち（鈴木大拙、柳宗悦）はしかし妙好人をいかに理解していたのか——たとえば、藤論文（「妙

好人と智慧——柳宗悦「無対辯文化」が投げかけるもの——)は「無対辯文化」という柳宗悦の妙好人理解の基調をテーマとし、柳が妙好人たちの言行のうちに論理中心の「対辯」(「分別」)的文化(=東洋的思考)、延いては仏道の核心としての「智慧」を見出した意義について論究する。その意義とは感性・直観による「体験的認識」の顯彰ということであり、著者が、「現代を生きる我々も、観念的認識方法(対辯)の限界性を踏まえたうえで、妙好人のように、直観的認識方法(無対辯)で生きることができれば、現代社会が抱える多くの問題を、解決の方向へ導くことができるのではないか」(六三二二頁)、と主張している点は傾聴に値しよう。また、浅原才一の遺した「そのまま」なる言葉を詳細に解説した佐藤論文(「妙好人浅原才一の「そのまま」について」)では、鈴木大拙が浅原才一の詩をことに称揚していた点が改めて確認され、さらに、才一の念佛詩にみる「このまま」から「そのまま」なる言葉を詳細に解説した佐藤論文(「妙好人浅原才一の「そのまま」について」)では、鈴木大拙が浅原才一の詩をことに称揚していた点が改めて確認され、さらに、才一の念佛詩能動の面を尽くしえず、「凡夫の心のままで」ということになりかねない。それで才一は絶対受動の心に働く他力能動の面をも意味し得る「そのまま」という言葉を好む(六七二二頁)と論定されるが、これは、大拙の妙好人理解の基調(=「日本的靈性」)を闡明してゆく上でも重要な指摘であろう。

以上、三十八論文から成る本書について若干の所感を記したにすぎないが、最後になお付言させて戴くなれば、鈴木大拙は妙好人(特に浅原才一)の「靈性的直覺」をきわめて高く評価していた一方で、その社会的意義に関しては或る種の疑問を抱いていたようである。たとえば、大拙は浅原才一の境地をめぐってこう述べる(「妙好人」「才市」—才市覚帳を通して—)、「どうも受動面から今一步抜け出て、衆生濟度の活動面を躍動させて欲しいものだと云ふ考を捨てられぬのである。これには、どうしても知性の涵養が必要である。靈性的直覺は直覺として、それ自身に大なる意味をもつ。これなくては知性も情性もその正当な立場を保持して行けないのである。が、直覺の世界だけでは、直覺の能動面、社会生活面と云ふものが閑却せられがちになる。他力の自力面と云ふものがあることを忘れてはならぬ」(七一五頁)と。これは、妙好人研究に対し更なる課題を提示したものであると思われるが、それはさて置いて、妙好人(又は「妙好人伝」)に関する優れた諸論文を多角的かつ重層的に編集した本書は、仏教学、佛教教育学に与る人々が是非読むべき一書であると言えよう。

法藏館、二〇一六年十月十六日発行、A5版、七五〇頁、一〇〇〇円(税別)

(東北大学)